

名は大體今のアフガニスタンの北、オクサス河の南、バルクを中心とした地方の名であります。このトカラ語の文献にはA・Bの兩種があつて、兩者の間はかなり相違はありながら、本來同一種語の方言的相違に過ぎないと見られて居ります。その中、まさしくトカラ語と呼ばれるべきものはそのA種に當り、資料の出土するのは、カラシヤル即ち古くから焉耆と呼んだ地方と、ツルファン即ち古くから高昌と呼んだ地方の一部であり、さうしてこの語で書いてあるのは佛典に限られて居る。然るにB種のもは焉耆・高昌の外、古の龜茲即ち今のクチャ（庫車）地方から多く出土し、佛典以外にも日用の言語として、例へば寺院の記録・通行免狀または壁書等にも用ゐられてゐる。

このB種の言語を何と名づけてよいかといふことが長い間に互つて喧しく歐洲の學者の間に論争されながら定まらず、この言語の研究の大家として有名であつたフランスのレギー氏やノルウエーのキノフ氏の如きもこれを何と名づけてよいか解らないといふに至つたのであります。尤もレギー氏は一九一三年に一度これをクチャ語と名づけたのであつたが、これに反對する人があつたので、その説を撤回し、生前これに關する最後の論文にも、適當の名稱は不明であると述べたのであります。これより先きベルリンのミュラー教授は一九一八年に *Toxri und Kuisan (Kuisän)* と題した論文を發表し、ドイツの中亞探検隊の獲た回鶻（ウイグル）語の佛典の奥書三種を解説しました。その第一の奥書にはこの經の由來を述べて、 *Kuisan (Kuisän)* の語から *Barçug* の語（トルコ語の義）に云々、第三には *Kuisan (Kuisän)* の語から *Toxri* の語に譯し、*Toxri* の語から *Türk* の語に譯した云々と見えて居ることを述べ、さうしてその *Kuisan (Kuisän)* *Kuisan (Kuisän)* *Kuisan (Kuisän)*（かやうに種々の讀方をしてゐるのは、ウイグル字では *ei* と *o* とが同一形で讀み別け難いので、特に括弧内の讀方を添附したのであり、*s* と *š* とは屢々混